

〈研究ノート〉

## 日本語文化の曖昧さに関する一考察

松 田 克 進

(受付 1999 年 9 月 3 日)

### I 日本語文化の曖昧さ

§ 1 <日本語は曖昧な言語だ>という、かつてよく耳にしたあの見解は、その後どうなったのか。私の見る限り、<日本語という言語そのものに曖昧さないし非論理性が内在している>というタイプの批判はかなり陰を潜めていると思われる。むしろ逆に、<日本語そのものは十分に論理的で明確な言語なのだ>というアンチテーゼが、しばしば論じられているようである。例えば外山滋比古氏は、「日本語は論理的でないという、いわれない迷信」(外山, 1978, p.135) について次のように述べている。

「……ヨーロッパの現在の科学、技術というのは、ヨーロッパの言語をもとにして発達してきたものであるために、日本語が、そういうものを表現するのに、ヨーロッパの言葉以上に苦勞しなければならないというのは事実であります。しかし、それを直ちに、日本語が論理的でないという問題に結びつけようとするところに、現在のいわゆる知識階級の人たちの迷信と錯覚があるのであります」(外山, 1978, p.138)

外山氏の議論に代表されるタイプの日本語擁護論を簡単に整理すれば、ほぼ次のようになろう。日本語とヨーロッパの言語(例えば英語やフランス語)とは全く異質な言語である。したがって、もしも英語やフランス語のような言語を論理性ないし明晰性の基準とするならば、それらと全く異な

る日本語は極めて非論理的で極めて曖昧な言語ということなるのは当然である。しかしながら、英語やフランス語を論理性・明晰性の基準とすべき必然的な理由など何もない。むしろ日本語には日本語なりの論理がある。例えば、名詞の単数・複数の区別をあえてしなかったり、文脈上明らかな主語は省略したり、肯定・否定の別を文末において示したり、といった特徴が、日本語という言語の論理（＝世界についての語り方）を構成しているのである。そしてその限りにおいて日本語は、当然ながら、極めて論理的で明晰な言語だと言ってよい。もし仮に日本語を論理性の基準に考えるならば、英語やフランス語の非論理性を指摘することだって可能になるであろう。例えば“*It is raining.*”における非人称主語 *it* などは、日本語から見た場合の英語の非論理性の象徴に他ならないのである。

なお、以上のような日本語擁護論の延長線上には、より積極的な見解、すなわち日本語賞賛論が位置している。例えば加賀野井秀一氏は、近著『日本語の復権』の中で、「日本語の利点」として、膠着語としての次のような特徴を挙げている。すなわち日本語は、名詞や動詞などの自立語とは別に「て・に・を・は」等の付属語を縦横に駆使する膠着語であるため、感情の微妙なニュアンスを表現する力に富み、また、外来語や新語を導入することに関しても非常に柔軟な言語となっている、というのである。そして加賀野井氏は次のように述べる。

「日本語は、私たちが母語への欲目で美化する以上に、あるいはまた、国粹主義者が盲目的に称揚するところをはるかに越えて、みごとな組成と構造とをそなえた言語だと言えるのではあるまいか。おそらく、古今をつうじて日本人の識字率が高かったのも、日本が短時日で欧米に伍するところまでたどりつけたのも、つまりは、この日本語がすぐれていたからにはほかならない」（加賀野井，1999，p. 172）

§ 2 さて、本小論で私が試みたいのは＜日本語の曖昧さ＞とその原因の

一部を今一度論じ直す，ということであるが，だからといって，＜日本語という言語そのものが非論理的だ＞とか＜曖昧だ＞などという意見に素朴に与するつもりはない。日本語という言語の構造や組成そのものに非論理性や曖昧さの不可避的な源泉があるというのは，あまりにも短絡的な見解であると私も考える。しかしながら，われわれの注意を，日本語という言語そのものの構造ではなく，日本語が一般に用いられているその様式に向けるならば——要するに，日本語という＜言語＞を問題にするのではなく日本語文化という言語＜使用＞を問題にするならば——やはりわれわれはそこに，フランス語や英語のようなヨーロッパ言語の言語文化には見られないタイプの曖昧さが存することを肯定せざるをえないのではなかろうか。たしかに日本語そのものは独自の論理をもっていよう。日本語の論理と，例えばフランス語の論理との間に優劣をつけるというのは，全くもってナンセンスなわざであろう。しかし，だからといって＜曖昧な日本語＞という指摘を百パーセント迷信として切り捨てることはできないと思われるのである。やはり日本語には，否，より厳密には，現在の日本語文化には，無視できない曖昧さが認められると思うのである。私が考えている曖昧さとは，例えば加藤周一氏が『日本語を考える』で，次のように指摘している問題と直結している。

「〔日本語の用法の〕もう一つの特徴は，議論をしないんですから，従って概念の定義をしない。一つの単語がどういう意味であるかということ定義をしないんです。……／その定義の習慣というのが，議論をする時は非常に大切です。定義がはっきりしてませんと，何を言っているのかわからなくなってしまう。ところが，日本社会では言葉を定義する習慣が弱くて，そのことが字引にも表れています。国語辞典というものを引くと，たいてい言い換えです。同意語はたくさん並べてあるけれど，その言葉の定義というのは，ない。たとえば「走る」と引けば，「駆ける」とか「かけ出す」とか，それから「速く歩く」とかが

書いてあるだけです。「二本の足をできるだけ、素早く交互に前に出し、両腕も交互に振り、身体の均衡をとりながら、全身を前へ進める動作」とは決して書いてないのです。これに対し、欧米各国語の辞書は、そういった、はっきりした内容を出してます。そういう言葉を必ず定義しています」(加藤, 1990, pp. 47-48)

むろんヨーロッパ語であれ、あらゆる語彙を徹底的に定義しているわけではない。どんな言語においても定義という作業にはある程度の曖昧さが残らざるをえない。しかし大切なのは、フランス語や英語、ドイツ語のようなヨーロッパ言語の<文化>においては、語彙を定義するということを少なからず重視しており、語彙の意味規定についてなるべく明確な同意を形成して行こうという傾向性がある、ということである。そして加藤氏の見るところ——そして私も同感なのであるが——それに比して日本語文化においては、そのような傾向性が極めて貧弱に思われるのであり、私が本小論で論じたい<日本語の曖昧さ>とはまさにこのことの内に存するのである。以下に、もう少し詳しく述べてみよう。

### § 3 例えば次のような一文について考えてみよう。

#### ①民主主義は衆愚政治に帰着する。

この文の真偽を考えるには、当然ながら、この文の意味を理解せねばならない。そしてこの文は「民主主義」を題目とした文なのであるから、それを理解するためには、まさしくこの「民主主義」という語の意味が肝要になる。もしもこの語の意味が、「多数決で物事を決める政治制度」という程度のものならば、文①はかなり信憑性を得るかもしれない。しかし「民主主義」の意味(内包)の内に、多数決原理のみならず、例えば<構成員の判断力が成熟するための十分な環境が整えられ、また、構成員に十分な情報が与えられている>という別の原理も含まれていると考えるならば、文

①はかなり眉唾なものに思われてくるに違いない。このように——極めて当然なことなのであるが——平叙文の真偽はそれを構成する語の意味に強く依存している。

では、語の意味とはどのようにして決められるのか。単一の人間が語の意味を決定することができるような極端な場合もあるにはあろうが（例えば、数学において、全く新しい抽象代数を構成するような場合である）、大抵、語の意味規定は、同じ言語を用いる複数の人間の間の同意を通して行われる。そのような同意の多少とも安定した結果は、辞書とか一般常識として立ち現れる。本小論で私は、こういったく語彙の意味規定についての間主観的な同意内容>を、哲学者カルナップの用語を借用して「意味公準 meaning postulate」と呼ぶことにしたい。

私が論じたい「日本語の曖昧さ」とは、したがって、<日本語文化においては意味公準を明確化しようという傾向性が希薄である>という形で定式化されることになる。そのような傾向性が希薄であるからこそ、例えば先ほどの文①の真偽についても、日本語文化においては、いつまでたっても答が出てこない、あるいは、出てきそうにない、のである。もちろん専門の政治学者ならば「民主主義」という語の意味規定をすぐに提示する用意があろうが、私が言いたいのは、一般的な日本語文化における傾向性のことである。なにげない日常会話に参加したりテレビのニュース番組を聞いている一般の日本語使用者は、①のような文に接しても、「民主主義」の意味規定を今一度明確化したいという欲求をそれほど感じることはないのではなかろうか。むしろ「民主主義」という言葉の曖昧模糊としたイメージを感じるだけで充分だと思うのではなかろうか。私が言いたい<意味公準を明確化する傾向性の弱さ>すなわち<日本語の曖昧さ>とは、まさにこのような一般的傾向性に他ならないのである。

むしろ私は、ヨーロッパ語文化においては意味公準が完璧に明確化されている、などという暴論を主張するつもりはない。そもそも意味公準を100パーセント明確化することなどは不可能なことである。また、意味公準は

決して確固不動のものでもなく、時代とともに動揺し変化するものであろう。しかし私が指摘したいのは、少なくともフランス語や英語、ドイツ語のようなヨーロッパ語の文化においては、日本語文化におけるよりも強力な、意味公準明確化への傾向性がある、ということである。日本語文化においてはヨーロッパ語文化に比して、まだまだ意味公準明確化への傾向性が貧弱である。その意味で、やはり日本語は曖昧だと考えるのである。

§4 次の節で私は、日本語におけるこのような曖昧さの原因について考察を試みるつもりだが、その議論に入るまえに、そもそもそういった曖昧さが善なのか悪なのかについて一言しておいた方がよかろう。ほとんど言うまでもなかろうが、意味公準を不明確のままにするという傾向は極めて危険である。なぜならば、それは人間と人間との間の議論を不可能にするからである。例えば、複数の人間が、

②社会主義は死んだ。

という文の正誤について議論を闘わせようとするとき、彼らの間に、「社会主義」という語の意味公準が整っていない限り、真の議論は不可能であろう。彼らは同じ言葉を用いながら、全く別の事柄を考えているかもしれない。加藤氏の『日本語を考える』から再度引用してみよう。

「社会主義は死んだとか、社会主義は終わりだとか、それが漠然と共産党や社会党になんとか結びついているわけだけど、社会主義っていったい何を意味するのかということが、あんまりはっきりしてないと思うのです。それをはっきりさせないと困ります。……社会主義とはスターリニズムのことを言っているのか、計画経済のことを言っているのか、あるいはもっと社会福祉的な制度のことを言っているのか、歴史的に言えばスカンディナヴィア社会主義のことを言っているのか、フェビアン協会 The Fabian Society のことを言っているのか、共産主

義のことを言っているのか、何のことを言っているのかわからない」  
(加藤, 1990, pp. 56-57)

意味公準がある程度明確化していることは、人間同士の間に議論が成立することの必要条件である。もちろん、人間同士の議論をそもそも必要としないのであれば、意味公準を明確化する必要もないかもしれない。しかしながら、さまざまな立場の相違を越えて、議論に議論を重ねることの重要性が自明となっている現代において、議論の可能性の条件を整備することは極めて重要であり、その意味で、意味公準を明確化するという作業は切実な意味を持っている。

むろん、意味公準を一気に整備するなどということは不可能である。大切なのは、異なる立場の人間たちが議論しようとするとき、あるいは議論している最中に、意味公準をつねに明確化しようという傾向を抱き続けることである。意味公準の明確化へのたゆまぬ努力こそが重要なのであり、人間同士の真剣な議論を可能にするのである。

## Ⅱ 「曖昧さ」の起源

§ 5 それでは、意味公準を明確化する傾向が弱い、という意味での＜曖昧さ＞が日本語文化に見られる原因は何だろうか。本章ではこの問題について考えてみたい。

真っ先に思い浮かぶのは、しばしば指摘される日本語社会の＜同質性＞という論点である。すなわち、日本語社会は概して同質の文化・価値観・世界観を抱く人間の集団であり、異質な人間が合流してくることが歴史的にまれであった。この「同質性」ゆえに、人間同士が本格的に価値観をぶつけ合い議論を闘わせる必要性がそれほどなかった。そして議論がそれほど必要とされない限りにおいて、意味公準を明確化しようとするモチベーションは希薄となる。ゆえに、われわれが言う意味での曖昧さが日本語文化に宿る、というわけである。

この日本語社会の同質性という論点に関して、外山滋比古氏は「室内語」という語を用いつつ次のように述べている。

「日本語はヨーロッパの言葉に比べると、室内語的な性格が強い。室内語ではやぼったいことを言わないのです。言わなくてもわかることを言う、それをやぼと言います。やぼにならないためには、共通に理解していることをみんな捨ててしまいます。……／家族の言葉があいまいな表現でありながら用をなすのは、家族間では言語の意識が非常に発達しているからです。洗練されている。それでハラ芸のような会話が意味をなす。……／日本語が、〔ヨーロッパ語に見られるような、〕レンガ積みという言葉の水も漏らさぬ論理を捨てたというのは、やぼだから捨てたのであります。必要とあれば、日本語でも相手にしっかり理解させる表現は、もとはあったと考えられる。ところがあまりに、互いによく言葉が通じ合い過ぎるものですから、だんだんやぼなところがきられるようになった」(外山, 1978, pp. 155-156)

外山氏の見解によると、日本語社会は「互いによく言葉が通じ合い過ぎる」ほどの同質社会であるために論理的にしっかりとした議論を展開することが「やぼ」として嫌われ、そのようなめんどろな議論が敬遠される傾向を持つ「室内語」となった、というのである。もしこれが事実ならば、日本語社会の同質性は、意味公準明確化の傾向の弱さの一原因と見てよいであろう。しかし私自身は、この点に関しては、話はそれほど単純ではないと考えている。本当にわれわれの社会は「互いによく言葉が通じ合い過ぎる」ほど同質なものであろうか。むしろ、そもそもお互いに真剣に議論を闘わせた経験があまりにも乏しいために、互いの異質性に単に気づいていないだけなのではなかろうか。言い換えれば、われわれの社会は同質な社会なのではなく、異質であることに単に気づいていないだけの＜疑似＞同質的な社会にすぎないのではなかろうか。



私の指摘したい可能性ないし仮説はこうである。日本語社会が同質なために、面倒な議論が「やほ」なものとして敬遠されるようになったのではない。因果関係の向きはむしろ逆であり、まず、面倒で煩雑な議論を「やほ」なものとして敬遠するような精神的土壌が日本語社会の内にあったのである。言い換えれば、論理的な議論展開よりもむしろ「ハラ芸」を尊ぶような精神風土がまずわれわれの社会にあったのである。そしてそれが議論（アーギュメント）に対する嫌悪感を助長した。議論が真剣になされないかぎり、当然、日本語社会の構成員は、自らの文化・価値観・世界観の相違にしっかりと気づくことはない。そしてこの＜相違に気づかない＞ということが同質性という＜神話＞を生み出したのである。——以上は、一つの可能性（仮説）である。しかし、この可能性がまさしく可能なものである限り、日本語社会の「同質性」という論点をもってして、日本語文化の曖昧さの一要因と見なすことは速断ではないかと思われるのである。

ちなみに、日本語社会の同質性は実は＜疑似＞同質性であり、その構成員にはさまざまな文化的・世界観的な相違があるのではないか、という可能性を傍証する事柄、しかも日本語論に密接に関わっている事柄を一つ指摘しておきたい。それは社会学者・作田啓一氏が指摘する、日本語の動詞の＜抽象性＞という論点である。以下に簡単に紹介してみよう。

作田氏によると、日本語の動詞は、「大体において運動の方向と速度だけを表していて、運動の主体、運動の対象、運動の状況といったいろいろの付属物を全部捨象する、切り捨てるという特徴をもっている」（作田、1978, p. 50）とされる。例えば英語の場合、go という抽象的な動詞以外に、drive（車で行く）、ride（馬で行く）というような具体的な動詞、あるいはコンテション（内包）を多く含む具体的・特殊的な動詞がよく用いられるが、日本語にはそのような動詞が存在しないのである。この点、日本語はフランス語に似ている。フランス語の場合も、「行く」という意味を表すにはaller という抽象的動詞が用いられるだけで、それ以上に具体的・特殊的な動詞は存在しないからである。作田氏の指摘によると、日本語やフランス

語に見られる、動詞のこのような抽象性は、言語社会を構成する人間の異質性の度合いに関係する。すなわち、外部から異質な人間が入ってくる言語社会では、「細かな違いというものは目につかないわけですから、微妙な違いをもつ動詞を使っても、新来者にはその工夫の面白さが全然わからない。そういうところでは、こういった具体的な動詞を使っても役に立たなくなるから、だんだん捨てられている」（作田，1978，pp.55-56）のである。

しかしそうすると、もしも外山氏の言うように日本語社会が「通じすぎて困る」ほどの同質的な言語社会ならば、日本語の動詞がこのように抽象的になることは考えにくいのではなかろうか。実際のところ、作田氏も次のようにこの問題について指摘している。

「日本語の動詞は具体的な性格をもってもいいのではないか。民族的に同質ですから、細かな微妙なニュアンスの違いというものは、みんなよくわかるはずなので、主体とか対象とか、状況の異なるたびごとに具体的な動詞を使っても、結構それで通用するのではないかと思われます。しかし、実際はそうではなく、……日本語の動詞は、大変抽象的な性格が強くて、ドイツ語や英語に比べると、むしろフランス語に近いということになっております」（作田，1978，p. 58）

ここには一つのパラドックスが見いだされる。従来しばしば日本語社会は同質的だと見なされているが、作田氏の＜日本語動詞論＞からするとそうとは言えないのである。作田氏自身は、このパラドックスをさしあたり解決するために、言語社会の＜同質性・異質性＞という座標軸以外に、＜狭さ・広さ＞という座標軸を導入し、日本語社会は＜同質的であるが広い＞社会であると論じている。この＜広さ＞が動詞の抽象化を促進したというのである。しかし、このような新たな座標軸を導入せずに当該のパラドックスを解消する最も簡単な方法は、言うまでもなく、日本語社会は従来思われているほど＜同質的＞ではない、と見なすことである。まさに

その意味で、作田氏の一連の＜日本語動詞論＞は、日本語社会の＜同質性＞神話に揺さぶりをかけるための一つの強力な材料となると思われるのである。

本節の要点をまとめておこう。意味公準が明確化する傾向が日本語文化において弱い理由として、日本語社会の＜同質性＞という論点を持ち出すのは的外れである可能性がある。なるほど、文化・価値観・世界観において同質的な人間集団の内部では、くどくどしい議論（アーギュメント）は「やほ」なものとして敬遠され、それゆえ意味公準を明確化しようとするモチベーションも希薄となろう。しかし、日本語社会が同質なために議論が敬遠されるのではなく、むしろ逆に、議論を「やほ」なものとして敬遠する精神風土ゆえに、日本語社会があたかも同質的であるかのような錯覚が生まれたとも考えられうる。これは一つの仮説にすぎないが、作田氏の＜日本語動詞論＞をその傍証の一つと見なすこともできよう。ともかくこの仮説を考慮する限り、日本語社会の＜同質性＞という論点をもって日本語文化の曖昧さの一要因と見なすのは性急に思われる。

§ 6 日本語文化の曖昧さは、おそらくさまざまな要因が複合的に重なった結果であろう。それらの要因を枚挙することなど不可能事であろうが、私は本小論で、二つの、かなり具体的な論点を指摘したいと思う。その第一は、ある種の＜認識論的関心＞の希薄さという事柄である。本節ではこれについて述べてみよう。

ヨーロッパにおいては、近代以降の認識論的関心の一つとして、＜与えられた文の真偽が、言語上の問題なのかそれとも経験上の問題なのか＞という主題があった。このことは、ライプニッツやカントの思想、あるいは今世紀の論理実証主義を見れば明らかである。例えば、

③群においては結合法則が成立する。

という命題について考えてみよう。近代以降の認識論においては、このよ

うに一つの文が与えられたとき、その真偽が言語上の問題なのか経験上の問題なのか、という問いがまず肝要となる。この文③の場合、その真偽は明らかに言語上の問題である。すなわち、文③は「群」という数学用語の意味公準からして明らかに真なのである（「結合法則が成り立つ」という特徴は「群」という数学用語の一般的定義の中に含まれている）。このように、文を構成する言葉の意味からして真理性が明かな文は、概ね（あくまでも「概ね」であるが）、ライプニッツの言う「理性の真理 *vérité de raison*」，またカントや論理実証主義の言う「分析命題 *analytischer Satz*／*analytic proposition*」に相当する。

では次のような文の場合どうか。

④地球よりも太陽に近い惑星は2つ存在する。

この命題の真偽は、むろん、「地球より太陽に近い惑星」という表現の意味によって自動的・機械的に決まるわけではない。それは、天文学的観察というある種の経験によって確定される。この文④のように、真偽が、表現の意味から自動的・機械的に決まるのではなく、観察を介して初めて確定される文は、やはり概ね、ライプニッツの言う「事実の真理 *vérité de fait*」，またカントや論理実証主義の言う「総合命題 *synthetischer Satz*／*synthetic proposition*」に相当する。

もちろん、哲学史的に見れば、文におけるこのような二つのタイプの区別は、さまざまな問題を引きずっている。本小論では哲学史について細かい議論をするつもりはないのでごく簡単に触れるにとどめるが、例えば、

⑤360は素因数分解すれば  $2^3 \times 3^2 \times 5$  になる。

というような算術命題の場合、これは果たして分析命題なのか総合命題なのか、というのは哲学史における重大な問題であった。カントなら文⑤を総合命題（ただしアプリアリな総合命題であるが）に数え入れるであろうし、それに対して論理実証主義ならこれを分析命題に分類するであろう。こ

のように、分析・総合の線引きの様式は、哲学的立場によって多様でありえた。更にまた、よく知られているように、今世紀後半になってアメリカの哲学者・クワインは、行動主義的な言語哲学的スタンスに依拠しつつ、＜分析命題か総合命題か＞という二分法そのものが間違っている、という有名な主張を展開した。すなわち、そもそも意味というものが行動主義のプロセスを通して経験的に形成され確認されるものである以上、従来「分析命題」とされてきたものも結局は「総合命題」に吸収されざるをえないというのである。私は、分析・総合の線引きに関する、このような哲学的問題にここで拘泥するつもりはない。私が主張したいのは、とにかくライプニッツ以来の認識論においては、＜与えられた文の真偽が、言語上の問題なのかそれとも経験上の問題なのか＞という問題関心が非常に強かったということ、そして、この問題関心が、文を構成する語の明確な意味に対する関心をいやがうえにも促進してきたのではないか、ということに他ならない。

なお、さきほどクワインの名前が出てきたので、ここで更にカルナップにも言及し、私が本小論で用いている「意味公準」という用語の由来について一言しておこう。すでに述べたように、今世紀の後半になってクワインは、分析命題と総合命題の線引きが明確にはできないと主張した。この主張に対しカルナップは、やはりそのような線引きが可能であることを論じるために、その著『意味と必然性 Meaning and Necessity』（1956）において「意味公準」という概念を提唱した。それは簡単に言えば、命題に登場する言葉の意味を決める公準ということである。そこでカルナップは、分析命題を＜意味公準から論理的に導かれる命題＞として規定し、分析命題が総合命題から明確に区別されうることを主張したのである。もっともこの「意味公準」という概念はとりたてて新しくも奇抜なものでもない。それは、われわれの言語活動において意識の有無深淺はともかく、常に前提とされている、語の意味についての間主観的な同意内容のことに他ならない。カルナップは「意味公準」という概念をあらためて提唱することで、そ

のような同意内容の存在に注意を集め、そのことを通じて分析・総合の二分法の自然さを(クワインに抗して)強調しようとしたのに他ならない。そして私は、＜言葉の意味についての間主観的な同意内容＞というこのカルナップ的意図のもとで「意味公準」という語を借用したのである。

繰り返しになるが、本小論では分析・総合の二分法に関する哲学的議論に拘泥するつもりはない。私が指摘したいのは、ヨーロッパでは近代認識論の重要関心事として、＜与えられた文の真偽が言語上の問題か、経験上の問題か＞ということがあり、この問題関心が語の明確な意味への希求を促進したのではないか、ということである。これに比して、日本語文化においては、これまで似たような動きがあっただろうか。あるいは現在、似たような動きがあるだろうか。私は、日本語文化においては、そのような問題関心は従来非常に希薄であったし、今も希薄である、と考える。例えば、文③と文④が与えられたとき、それぞれの真理性が言語的領域に属するのか、経験的領域に属するのか、という知的問いかけは、日本語文化ではあまり一般的ではないように思われるのである。そしてまさにこの局面で、日本語文化においては、意味公準を明確化しようというモチベーションが、少なくともヨーロッパ語文化に比してかなり低くなっていると考えられるのである。

§7 日本語文化の「曖昧さ」の原因として私が考える第二の論点に移ろう。それは、明治期以降、ヨーロッパ文化との接触のもとで次々に日本語に導入された翻訳語(以下「近代翻訳語」と呼ぶことにする)に密接に関わる論点である。そしてまたそれは、柳父章氏が「カセット効果」と名づけている現象とも深く関係している。われわれはまず柳父氏の言う「カセット効果」とはどのようなものを概観することから始めよう。

「カセット」とはフランス語で「宝石箱」を意味し、柳父氏は近代翻訳語が宝石箱とある意味で類比的であることを次のように説明する。

「ことばは、もともと「カセット」のようなものだ、と私は考える。「カセット」とは、case，つまり箱の小さなもので、フランス語で言うcassetteであり、宝石箱という意味で使われる。テープ・レコーダーで使うカセット・テープも同じ意味から出ている。／小さな宝石箱がある。中に宝石を入れることができる。どんな宝石でも入れることができる。が、できたばかりの宝石箱には、まだ何も入っていない。／しかし、宝石箱は、外から見ると、それだけできれいで、魅力がある。その上に、何か入っていそう、きつと入っているだろう、という気持ちが、見る者を惹きつける。／新しく造られたばかりのことばは、このカセットに似ている。それじたいが、第一に魅力である。そして、中にはきつと深い意味がこめられているに違いない、という漠然とした期待が、人々を惹きつける。」(柳父，1976，pp. 24-25)<sup>1)</sup>

近代翻訳語は、宝石箱のような魅力的な外観を持っており、その魅力ゆえにわれわれは、一知半解のままそれを使ってしまう。そしてそのように使い続けているうちにわれわれは、近代翻訳語の意味については依然として一知半解であるにもかかわらず、なんとなく分かった気分になってしまう。かくしてある種の思考停止状態に至ってしまう。これが柳父氏のいう「カセット効果」の典型的なありようである。すなわち、「まったく意味のないことばが、ことばじたいの魅力とも言うべき効果をもって」(柳父，1976，pp. 185-189) おり、その効果(＝カセット効果)によってわれわれは目をくらまされ、よく知らない言葉の意味が何となく分かったような気分になってしまうのである。もちろん、このような事態は「電話」「列車」「地質学」のようなかなりの具体性を備えた言葉に関しては起こらないであろう。これらの言葉の意味を尋ねられれば、大抵の人はある程度正確な返

1) ここに引用したのとはほぼ同じ箇所が、加賀野井氏の著作(1999，p. 133)にも引用されている。私が柳父章氏の「カセット効果」という用語を知ったのは、加賀野井氏のこの著作を通じてである。

事を返すことができよう。問題となるのは、例えば「権利」「自由」「哲学」などといった多少とも抽象的な近代翻訳語の場合である<sup>2)</sup>。これらの翻訳語の場合、その漢字の字面の魅力に幻惑されて、われわれはつい、その意味について一知半解でありながら分かったような気分になってしまう。柳父氏によるとこのようなカセット効果は日常的にさまざまな場面に見られるという。例えば氏は次のように述べる。

「漢字を好むのは、知識人に限らない。「幸福」だわ、という少女は、何かよく分らぬ意味を、この「幸福」という宝石箱の中に託したのである。私じしんの体験で言うと、かつて人里離れた海岸をぶらついてたとき、老婆に出会った。道を尋ねると、老婆は、どうしてこんな所へ来たのか、と言う。仕方なく、いろいろと説明したが分らない。そのうちに、老婆は「ああ、観光ですか」と言い、すっかり納得したようすであった。「観光」という漢字二字は、あらゆる疑問を封じこめたのである」（柳父，1976，pp. 168-169）

§ 8 私が考える、日本語文化の「曖昧さ」の第二の原因は、柳父氏の言うこの「カセット効果」に密接に関係している。柳父氏は「カセット効果」という用語によって、日本語における近代翻訳語の＜一見意味公準がはっきりしているように見えて、実は、明確な意味公準がない＞という虚無性を指摘しているのであるが、私が考えるに、この＜虚無性＞の要因は、近代翻訳語自体に内在しているのではないか、ということである。すなわち、近代翻訳語は、そもそも初めから、明確な意味公準を容易には持ちえないような、かなり悲劇的な特徴を抱え込んでいるのではないか、ということ

2) ちなみに柳父章氏によると、カセット効果は驚くべきことに「彼」「彼女」のような人称代名詞についてまで生じるとされる。氏は田山花袋の小説『一兵卒』を題材にしつつ、このことについて非常に興味深い分析を提出している。Cf. 柳父（1976），pp. 185-189。



である。

近代翻訳語は、基本的に、次のような図式で造られ導入されたものであると言ってよかろう。すなわち、まず最初に、right とか liberty, society, philosophy のようなヨーロッパ語を日本語に導入したいという要求があり、第二に、その要求を充たすために、漢字という中国語の文字を組み合わせ、それを新語として日本語に導入する、という図式である。このような図式を経て経由された近代翻訳語——例えば「権利」「自由」「社会」「哲学」——の意味公準を整備しようとするさい、われわれはどうしても、次のようなジレンマに逢着せざるをえないことになる。それはすなわち、これら近代翻訳語に対応するヨーロッパ語の意味公準に遡ればいいのか、それとも、近代翻訳語を字面の上で構成する漢字の意味公準に遡ればいいのか、というジレンマである。言い換えればこうである。近代翻訳語には二つの語源がある。第一に、翻訳語に対応するヨーロッパ語。これを「第一語源」と呼ぶことにしよう。第二に、翻訳語を構成する漢字の語源。これを「第二語源」と呼ぼう。このような二種の語源を持つ近代翻訳語の意味公準を整備しようとする作業が極めて困難なものになるのは明らかであろう。なぜならそのような作業は、第一語源と第二語源との間のいわば＜叉裂き状態＞に逢着するからである。

このような叉裂き状態は、日本語だけに特有の現象ではなかろうが、ヨーロッパ語の場合には起こらないはずである。例えば英語がギリシア語やラテン語から言葉を導入する場合には起こらない。実例をあげるならば、英語には sympathy というギリシア語起源の言葉がある。この言葉の意味公準を定めるとき、まず最初の手続きとしてはギリシア語の語源を振り返るということがなされるであろう。その際、何らかのジレンマ、あるいは叉裂き現象は生じない。語源が二方向に分裂していないからである。それに対して、日本語における近代翻訳語の場合、語源の分裂現象が生じているのである。

整理しよう。柳父氏は「カセット効果」という用語によって近代翻訳語

の虚無性を指摘した。われわれは近代翻訳語の字面に幻惑され、その意味について一知半解であるにもかかわらず分かった気分になってしまうのである。そしてさらに私は、そのような虚無性が、近代翻訳語にからみつくある種のジレンマから準必然的に生じる現象ではないか、と推測する。すなわち、近代翻訳語の意味公準を明確化しようとしても、われわれは二つの語源の間の又裂き状態に陥ってしまう。われわれは、近代翻訳語の意味公準を明確化しようとしても、その最初の第一歩において、大きな戸惑いの中に放り込まれてしまう。権利とは何か、自由とは何か、という問題を考えるとき、われわれは即座に、right や liberty の由来を探ればいいのか、それとも「権」と「利」、あるいは「自」と「由」の語義を探ればいいのか、というジレンマに直面するのである。近代翻訳語は、むしろ、ヨーロッパの文化・思想・科学を日本に導入するために極めて大きな役割を果たしたのであろう。しかしそれは、多分に、便利なブラックボックスないしカセットとして機能したのであって、日本語文化においてその内実（つまり意味公準）は、必ずしも十分に明確化されてきたわけではないと思われるのである。

### Ⅲ 結び——「曖昧さ」に抗して

§ 9 日本語文化の曖昧さという現象は、さまざまな要因が複雑に組合わさって生じた結果であろうし、それらの要因を枚挙することは不可能事であろう。したがって、この曖昧さを、ある程度であれ克服することは、決して容易なことではないと思われる。しかし私は、以上に、そのような要因に数え入れることができるであろう二つの事柄を指摘した。すなわち、ある種の認識論的関心の希薄さと、いわゆる「カセット効果」を準必然的に生じさせる、近代翻訳語にまつわる問題とである。少なくとも、これら二つの論点に関する限り、日本語文化の曖昧さに抗する方策は、ある程度考えることができると思う。その方策についてごく簡単に述べることであって、本小論を結ぶことにしたい。

まず、＜与えられた文の真理性が言語上の問題か、経験上の問題か＞という認識論的関心の希薄さ、という論点に関して、曖昧さ克服の方策を考えてみよう。このような認識論的関心がヨーロッパ語文化において登場したのは、おそらく、ライプニッツ哲学やカント哲学、あるいは論理実証主義などといった思想的伝統があって初めて可能になったのであろう。しかしだからといって、同様の関心を日本語文化において育成するために、そういう思想的伝統に対応する伝統が日本に自然に誕生し成長するのを気長に待つというのはあまりに悠長な話である。私は、当該の認識論的関心を育成するために実効的なのは、日本語教育にこの種の関心を意図的に取り込むことではないか、と考える。簡単な例を使って具体的にいえば、

⑥クジラは胎生である。

というような文を生徒に提示するとき、この文の真理性が言語上の問題か経験上の問題か、という問いかけを、例えば中学校段階の日本語教育において積極的に行うのである。多くの生徒は、文⑥の真理性は経験に依存する、と直観的に考えるであろう。そのとき教師は次のように問いかけるとする。「しかし、もし卵生のクジラが発見されたならば、それはクジラの定義からして実はクジラでない、と言えいいのではないか。そうすれば、そもそもクジラは、定義、つまり言葉の意味からして胎生なのではないか」と。このように問いかけられた生徒は、文⑥の真理性を考察するためには「クジラ」という語の意味公準を明確化する必要がある、と実感することになる。

むろん、この手の問題をあまり深く追求すると、現代の言語哲学の問題（例えば「自然種の指示」の問題）に直結してしまう。日本語教育は言語哲学を内包する必要はないから、意味公準にまつわる哲学的問題に拘泥するには及ばない。文⑥の真理性に関する問題についても、明快な答を教師が提示する必要はない（そもそも、そのような明快な答など存在しないのである）。しかし、＜意味公準を明確化せねば、文の真理性を確認するための

手続き(=文の真理条件)が確定できない>という基本テーゼは、ある程度、日本語教育の段階で生徒に実感させるほうが、少なくとも日本語文化の曖昧さに対抗するためには良い、と私は考える。そのような実感こそが、日本語を明確に使おうという精神風土を育てるために、極めて効果的に寄与するのではなからうか、と思うのである。

§10 次に、近代翻訳語の意味公準を明確化するにあたっての問題点について考えてみよう。この問題の本質は、意味公準を整備しようとするさいに、ヨーロッパ語という第一語源と、漢字という第二語源との間における、いわば<叉裂き状態>に直面するという点にあった。この叉裂き状態をとにかく解消することが肝要である。では、どうすればよいのか。

例えば、「自由」という語の意味公準を明確化するさいに、われわれはどうすればよいのだろうか。libertyというヨーロッパ語の基本的意味を振り返ればいいのか、それとも、「自」と「由」という漢字の意味を重視すればいいのか。私が考えるに、そもそも近代翻訳語が、<ヨーロッパ語には存在し日本語には存在しなかった言葉を、新たに日本語に導入する>ために工夫されたものである以上、近代翻訳語の意味公準を明らかにするさいには、あくまでもヨーロッパ語の意味を中心に置いて作業を遂行すべきではなからうか。libertyを日本語に導入するさい、そもそも「自」と「由」という漢字を使う必然性があったわけではない、ということをわれわれは忘れてはならない。柳父章氏が紹介しているところによると(柳父, 1976, pp. 107-117), 明治初年, libertyを翻訳するさいには、さまざまな翻訳案が出された。「我俥」「自主」「自在」「寛弘」などである。そして、これらを差し置いて「自由」が採用されねばならなかった強い必然性はなかったはずである。例えば、スチュアート=ミルの“On Liberty”を『自由之理』と訳した中村正道にとってさえ、「自由」というのは決して確定した訳語ではなかったのである。したがって、現在われわれが「自由」という語の意味公準を明らかにするために、「自」と「由」という漢字の語源に執着すると

すれば、それはかなりの外的なことであり、と言わねばならないであろう。私は、こういった近代翻訳語の意味公準を考えるさいには、対応するヨーロッパ語（第一語源）の意味を優先的に重視することによって、例の＜叉裂き状態＞と決別するのが適切であると考えているのである。

むろん、第一語源を優先するからといって、当該の近代翻訳語の意味公準がすぐに明らかになるなどと私は考えていない。例えば liberty という語の意味公準を明らかにするのは難題であろう。また、明治初年以降、日本語文化において、この「自由」という語が具体的にどのように用いられてきたかという歴史性をも顧慮する必要があるが、場合によっては出てくるであろう。しかし、とにかく、ヨーロッパ語と漢字との間のジレンマから脱出することは、近代翻訳語にまつわる曖昧さに対抗するために、まっさきにせねばならないことではなかろうか。そして、そのようにジレンマから脱出することによって、われわれは、柳父氏の言う「カセット効果」、すなわちある種の思考停止状態を克服する契機を手に入れることができると思われるのである。

＜日本語は曖昧な言語だ＞という見解は最近かなり低調になってきているように思うが、意味公準の明確さに関しては日本語文化には大いに問題があると私は考える。本小論で私は、その問題の内実と部分的原因について、何人かの識者の見解を参考にしつつ考察し、最後に、その原因に抗するための方策について短く私見を述べた。日本語を、より有効な議論の道具とするためには、このような方向の考察、すなわち日本語文化における意味公準の問題をめぐる考察が、さまざまな論者によって多角的に展開される必要があるのではなかろうか。とにかく、人間社会にとっての議論の意義を重視する限り、言語文化の曖昧さを払拭しようとする努力は、決して無駄なものにも過度なものにもなりえないであろう。

<引用文献および参考文献>

- 加賀野井秀一 (1999) : 『日本語の復権』 (講談社現代新書, 1999)。  
加藤周一 (1990) : 『日本語を考える』 (かもがわ出版, 1998)。  
阪倉篤義 (1984) : 「日本的知性と日本語」, 相良・他 (1984) に所収 (pp. 3-38)。  
相良 亨・他・編 (1984) : 『講座・日本思想／2・知性』 (東京大学出版会, 1984)。  
作田啓一 (1976) : 「社会と言語」, 多田・他 (1976) に所収 (pp. 45-132)。  
多田道太郎・他 (1978) : 『日本語と日本文化』 (朝日出版社, 1978)。  
富田恭彦 (1994) : 『クワインと現代アメリカ哲学』 (世界思想社, 1994)。  
外山滋比古 (1976) : 「日本語の論理」, 多田・他 (1976) に所収 (pp. 135-174)。  
柳父 章 (1976) : 『翻訳とはなにか』 (法政大学出版局, 1976)。  
—— (1979) : 『比較日本語論』 (バベル・プレス, 1991)。

## Summary

### On the Ambiguity in the Culture of the Japanese Language

Katunori MATUDA

The author doesn't say that the Japanese language itself is ambiguous, but he finds ambiguity in the use or culture of the language. That ambiguity lies in the weak tendency to clarify the meaning postulates of words used. The notion 'meaning postulate' is taken from Carnap's philosophy of language in order to refer to the meaning of a word that language users agree on intersubjectively.

The author mentions two factors that are supposed to bring about the ambiguity in the culture of the Japanese language. The first is the weakness of the epistemological concern: "Is the truth of a given sentence a matter of language or a matter of experience?" This kind of concern would motivate language users to clarify the meaning postulates of the words in a sentence in question. The second factor has to do with words made up in the Meiji era in order to translate European notions into Japanese. Because those words are made of Chinese characters, language users are naturally led to a dilemma as to interpret them according to corresponding European words or according to Chinese characters constituting the words. By suggesting briefly how to cope with the ambiguity, the author concludes the paper.